

【書評論文】

時間観念の癒しのために

辻 信一著 『「しないこと」リストのすすめ—人生を豊かにする引き算の発想—』

ポプラ社, 2014年9月, 230頁

柴 田 有

私はアルモン教の信者である。アルモン教は人類最古の知恵を伝えており、その教えは現代においても光り輝いている。現代文明の過剰な便利、異常な豊かさにたいしても立ち向かうことができるほど、崇高な力を秘めている。その教義を一言で説明しろと言われれば、こういうことだ——、毎日の生活はなるべく有ルモノ（アルモン）で間に合わせる。今日の夕食は何にしようかと迷ったなら、手持ちの食材を使って、アルモン・メニューで済ますとよい。残り物でも結構気の利いた料理ができるものだ。ただし、絶対そうしなければいけない、ということではない。なるべく、の話だ。戒律を重んじる私は、なるべく夏季にクーラーを使わない。と言うより、家にクーラーがない。相当頭を使って、家の網戸の配置を工夫してきた。家の西側外壁に沿って落葉樹を植えた。南側にはヨシズを立てる。それでも暑い日は、夕方に少し水を撒く。これで十分快適な夏になる。完璧には言わないが、何十年前前からそれで足りている。家にテレビもないから、お陰様で、電気料金は最低ランクかその一段上である（100V30A契約）。

ところで「しないこと」リストの著者辻さんにも、アルモン教の気配を感じるのであるが、本当のことは知らない。彼は本の中でこういう言葉を引いている。古代中国の哲人、老子の言葉のパラフレーズだと言う。

いまあるもので充分、

と知る人だけが、

いま生きることの豊かさを知るんだよ。（52頁）

辻さんは老子の言葉を手がかりにして、「しないこと」の意味の深みに注意をこらす。「すること」が積極的で、「しないこと」が消極的に見えるが、実は逆なのだ、と——「「すること」はしばしば不満足を活動のエネルギーとしている。それと対照的に、「しないこと」をとおして現れる「足るを知る」という境地には、今ここにこうして生きている自分についての満足があふれている。」（52頁）この着想を活かして、さらに、「しないこと」リストの提案へと進んでいる。それは、本書全体の出発点を示す言葉になっている。

さらに、こう言ってもいいのではないか。「すること」ばかりを優先する「するする社会」のなかで、「しないこと」リストが果たす役割は、「いること」や「……していること」の大切さを思い出させてくれることだ、と。（54頁）

アルモン教の生活法が身についてくると、時間の過ごし方も、時間の考え方も変わるようだ。与えられた時間（アルモン）で充足するようになる。わずか数十秒かもしれないが、青から赤に変わる時の信号待ちだって、交差点に突進するようなことはしない。しばしの時に呼吸を整えることができるし、今日の体調を自己診断することもできる。落ち着いて街の景色を眺めることも etc.. 時

間を稼ぐことより、時間を充実させることのほうが大事だと思う。長い目で見てその方が結局、時間の節約にもなる。社会に出てみればすぐに経験すると思うが、良くある例を挙げておこう。会議で性急な結論を出してしまうと、そのために生じる損失はとてもの大きなものになる。一つの不確かな意見が通ってしまうと、無理な方針が出てくる。一年後、二年後にそれがどれほどの時間、予算、人手を浪費することになったか考えてみればよい。

「しないこと」リストの辻さんも、時間というもの色んな風に考えている。本書の全体はここに焦点を定めている、と私は見ている。初めのほうで著者自身がこう言っているのだから、紹介しておこう。

こんなふうにはぼくは考えている。ぼくたちの社会で多くの人々が感じている生きづらさも、山積するさまざまな社会問題も、環境問題も、世界中で起こっている争いも、みんな根っここのところではつながっている、と。その根っこにあるのが時間の問題だ。時間について考えるのは難しい、とあなたは思うかもしれない。だけど、大丈夫、ちゃんと筋道はある。じつは、本書は、慣れていない人にも時間という大事な問題について考えてもらうための入門書なのだ。忙しくて時間のない人のための時間論、とでも言っておこう。何の得になるかって？ あなたは時間と仲直りできるでしょう。たぶん。(28頁)

本書の一番印象的な点は何だと思うか？ そう尋ねられたら、私は答えるだろう——、「スローライフ」とか「しないこと」とか、街行く人の誰一人、耳を傾けてくれそうもないことばかりだ。叫んでも答えの返ってこない砂漠、まさに荒涼とした都会に立って、それでも己の言葉を語ろうとする勇氣。それが素晴らしい。預言者的な息吹が感じられるのではないか。『「しないこと」リストのすすめ』は、そういう勇氣から生まれた人生論の指針である。

この本の問いかけにたいして、私はどのように答えるのか。この点についても、一言したいと思

う。われわれの生き方、暮らし方について、本書は良質なメッセージを語っている。その点はすでに述べた。けれども私は一介の哲学者として、時間とは何かを考えている。これからもそうするだろう。以前から私は、天体の運行に調和して生きることを試みている。時間とは何か、を考えるための手がかりがそこにあるのではないかと思っている。天体の時間と自然現象とは表裏一体をなしている。そういう時間の節目を日本語では、季節、時節、節分、二十四節気などと表現してきた。二十四節気は太陽の円軌道を15度ずつに分け、15度カケル24で360度になっている。二十四節気は農事暦とも結びつきが深い。二十四節気の一つは春分である。われわれはその日をお彼岸と呼び、春の予兆を感じつつ、オハギを食べてその日を祝う。

しかしわれわれは普段、(天体時間ではなく)時計時間に合わせて生活している。そして時計時間が「時間」だと思っている。そこで時間のスリ替えが生じる。だが時計時間は、自然界の生成消滅を引き起こす原因ではない。それは都会的な生活のなかで生まれた約束事なのだ——、列車の時刻、授業時間 etc.。だが天体の運行は違う。自然現象に運動やリズムをもたらしめている。読者はここで違和感を覚えるかもしれない。だが少し考えてみれば、すぐに分かると思う。

畑で野菜を作ったことがあるだろうか。経験のある人はご存知であろうが、キャベツでもキュウリでも、野菜は太陽の運行に応答しながら成長する。昼夜や四季のリズムが野菜の生育に反映するのである。だから植物はそれぞれ固有の生命を生き、しかも同時に生かされている。そのように私も、生きかつ生かされる自分を見出したいと思う。天体のリズムを反映して、自然界に生成消滅が繰り返される。そのように私も、天体の動きに調和して生と死の意味を了解したい。まだまだ入門コースである。しかしこれは一つの動機から出発している。離島の生活がそれを教えてくれたのだ。離島で送った生活は忘れがたい経験となった。そこから考えたことを、私は一つの小文に書いてみた。以下でそれをご覧にいれたい。

高速ジェット船

数年前から就航した高速ジェット船は、竹芝桟橋と式根島をわずか三時間で結ぶ、驚異的な交通手段である。これに対し従来からの大型客船は、夜十一時に発航して、翌朝八時に到着する。比較するといかにも鈍足旧式に見え、いずれ廃止の運命にあるのではないかとさえ思えた。しかし今年になって実情を聞いてみると、必ずしもそうでない面が出て来ていることに気づく。先ず、高速船は停止すると風波に弱い。航路の途中でエンジン故障が起こった場合、船体の揺れで乗客は皆酔ってしまうそうである。また海が荒れる日には、出航時間を一時間も遅らせなければならなくなったりする。こうして皮肉なことに時間があてにならないと言う。次に、営業面の心配もある。わずか250人定員の高速船は、営業効率の点でも樂觀できないのではないか。単純に比較した場合、大型船は千人を収容できる。さらにまた、高速の運航は安全性の面でも問題が残る、大型生物や浮遊物との衝突事故が報道されている。安全性を考えれば、高速船は常時五名の見張り体制で運航しなければならない。とすると、勤務条件の問題につながってくることも考えられる。就航してから日は浅いのであるが、そういうことを考えあわせると、まだ不安なしとは言えない段階なのである。こうした問題を抱えながらも、新鋭の高速船はやはり便利だ。三時間で東京に帰れるとなれば、現地の海で一時間でも多くつろぎたい観光客にとっては、実にありがたいことである。

しかし便利かどうかとは別に、真に考えなければならないことがひとつある。高速船の出現によって観光の意義が変質するのではないか、という点である。宣伝文句に謳われているとおりの運行が可能だとすれば、式根島日帰りの計画も可能となる。実際に、現地でそういう人々と言葉を交わす機会があった。埼玉県から来ていると言う家族連れである。この人達は言うのだった――、観光スポットを手早く回る、島の滞在は二時間で切り上げる、それからジェット船に飛び乗る、そうすれば、その日のうちに帰宅できるのだと。観光とかレジャーというよりも、まるでゲームの早上

がりに熱中しているかのような口ぶりである。正直なところ、その話を聞いていて暗い気持ちにならざるをえなかった。都会人が都会の意識で立てたゲーム戦略にとっては、時間との闘いが目標となってくる。いかに効率よく時間を切り詰めるかが観光の内容になってくるからである。

もっともそれは考えすぎのような気がしないこともない。「君、それは心配しすぎじゃないか。そういう人も居るだろうけど、ごく一部の話だヨ」と言って、たしなめてくれる人もあるだろう。そうかも知れない。観光ゲームの早上がりをするような人は例外だ、と私も言いたい。言いたいだけけれども、やはり気に掛かることがある。現代の都会人は時間の節約に、異常に執着しているのではないか。駅舎やビルで目にするエスカレーターの使い方はその典型である。かつてエスカレーターを階段のように上る人はいなかった。それがいつごろからか電動式階段の上りに使うようになった。しかも今や二段を一足飛びにする人もいる。そればかりか最近は下りのエスカレーターも跳んで下りるようになった。エスカレーターに限らず都会人は盲目的に急いでいるような気がしてならない。急ぐことが自己目的化してしまったのであろうか。もしそうなら、潜在的な心理状況が島の観光にも影を落とすことだろう。都会発の観光ゲームが珍しくなくなる日が訪れるかもしれない。

都会の日常生活を貫いて、時計時間というノッペラボウな時間が流れている。時計時間に従って生活を律し、計画を立てるのである。都会の公共生活をまとめる方法はそれ以外にない。電車の発車時刻、就業時間、授業時間、年間予定など。様々な時間を気にしながら生活をやりくりするしかないのである。けれども時計は人間の外にある。われわれの喜びや生きがいと無縁に、刻々と直線上を進んで行く。自分との関わりなしに存立する、他律的な時間。行く手に横たわる、果てしない砂漠のような時間。現代人は息を切らしながら、そういう時間から脱出しようとする。それが急ぐという行動だとすれば、あまりにも当然な心理の働きではないか。都会人が盲目的に急いでいるとい

う見方は、少々修正すべきかも知れぬ。

確かに都会生活のなかにも、急ぐことのない時間がある。砂漠のなかを流れる、オアシスの湧き水のような時間である。歌う時間、歌を歌うのは早く歌い終えるためではない。愛する時間、愛する時間を切り詰めようとする人はいない。それはそうだと思う。けれども都会人の心身には、市場経済の原理が染み付いている。市場経済制の下で課された時計時間に対して、どれだけ自由な展望を拓くことができるだろうか。濁流のように流れていく時間のなかで、都会人は何らかの抵抗を試みずにはいられない。そういう状況のなかで、人々は己の視野の外に突き抜ける経験を探している。日常の時間から抜け出て、気分転換を図りたいと思う。新鮮な感動を欲するのである。自己の参加する時間、生きがいのある時間、音楽のように流れる時間を思い出したい。

観光とはそもそも何だったのであろうか。都会人の立場で言うなら、都会には無いものに触れることこそ観光の楽しみではなかったか。生活の流れにあって、折々に異質な時間を挿む経験は、時間というものの本性を考える上でも意義深い。現地の風土や生活ぶりを訪ねて、未知の自然や文化を体験することが旅行者にとって喜びとなる。島の住民がその地の風光を活かし、様々な制約と折り合いをつけながら、調和した生活形態を生み出している様が旅行者に感動を与える。旅先の空気を心行くまで吸って、未知な世界の時間の流れに身を浸す。それは時間をかけるに値する経験であろう。またそれは多少の時日を要することであろう。われわれの視覚に景色の奥行きが見えるようになる、その過程には時間が必要である。視覚が澄んでくると、風景がよく見えるようになる。もっと澄んでくると、もっとよく見えてくる。だからこう言って良い——、時間の経過を伴って、視覚は澄まされ、景色の奥行きも見えてくるのだ、と。

こんな経験をした人もあるだろう。伊豆諸島を訪れた人なら、誰しも目にする情景がある。島の墓地に朝集ってくる住民の姿である。人々は朝ごとに足を運び、御先祖の世話をする。黒い服装などしていない、普段着のままである。かしこまっ

た様子が見られるわけでもない。お彼岸の墓参りのような、特別の日の物々しさはない。日常の習慣なのである。そこが都会人の目には不思議に映る。けれども島の生活にあっては、ありふれた情景なのである。人々は朝、軽トラックでやって来て、新しい花を供える。白い砂を敷く人もいる。水を汲んで墓石にかけたり、線香を立てたり、である。そのようにして二十分か三十分の、朝の勤めを果たす。それからめいめいの生活に戻って行く。

通りがかりの訪問者の目には、それだけの前景しか映らないかもしれない。しかし二度目、三度目になると何かが変わってくる。よく見れば、墓地の景色にはさらに奥行きがある。集まってくる人が墓地に顔を見せれば、オハヨーと言って声を掛ける相手がいる。そして挨拶のついでに手を休め、何かしら言葉を交わすのでもある。漁の良し悪しや船の調子、冠婚葬祭のこと、家族のグチ、有らぬうわさ？、あるいは畑づくりの情報交換か、その日の催しの計画か……。こうしてお勤めは寄り合いのひとつきになっている。墓地はコミュニケーションの場にもなっている。しかもそれだけではない。朝のひとつき、それは島のみんが同じ営みをするときである。めいめいに墓の世話をしているようではあるが、そこには同じような身体動作、同じような手仕事が見られる。こうして身体空間のコミュニケーションも生まれる。それが程々の張力で島民の心を繋いでいるのではない。

島の生活の時間が毎朝墓地で刻まれる。先祖達から続く時間の刻み方が今日も繰り返される。その刻み目は他律的に強いられるものではない。お墓の勤めを休んでも、かれこれ苦情が出るようなことではない。かと言って個人の自由によるものでもない。それは共同体のなかに自然に生まれた時間のリズムである。島の生活と日月の運行とが不思議な仕方と調和した、そういう時間の流れなのである。